慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Thérèse作品群について
Sub Title	On the Thérèse Cycle (Sur le cycle de Thérèse)
Author	高山, 鉄男(Takayama, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.73, (1997. 12) ,p.557- 573
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	安藤伸介, 岩崎春雄両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00730001-0557

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Thérèse 作品群について

高山鉄男

Thérèse は，いうまでもなく Mauriac : *Thérèse Desqueyroux* の女主人公であるが，この作品の最大の問題点は，夫毒殺未遂にいたる女主人公の動機が，判然としないことにある。これについて，筆者はすでに，いくつかの論文において[1]，この作品を決定稿の形においてだけでなく，成立の過程においても考察すべきであり，具体的に言えば，最初の未定稿，*Conscience, instinct divin* 及び草稿 I をも考慮にいれて検討すべきこと，そのようにするとき，Thérèse の犯行の隠れた動機は，女友達 Anne de La Trave への主人公の同性愛的情念に求められることを述べた。本稿では，*Thérèse Desqueyroux* 以後の作品に現れた Thérèse の人間像をもあわせて検討し，Thérèse の心理変化の過程を全体として考察したい。そうすることによって，この主人公に託された作者の意図がより明らかになると信ずるからである。実際，Thérèse は *Thérèse Desqueyroux* 以後も Mauriac の作品に登場し続け，1933年には，二つの短編，*Thérèse chez le docteur* と *Thérèse à l'hôtel* が刊行された。さらに1935年には，長編 *La Fin de la nuit* が刊行されている。最初の未定稿 *Conscience, instinct divin* が書かれたのは，1925年末と推定されるので[2]，その時から数えるならば，じつに十年間にわたって，Thérèse は，作者の心を占め続けたことになる。もってこの人物に託された作者の心の重みを，思うべきであろう。

Thérèse が登場する作品のすべてを，Thérèse 作品群と呼称しうるとすれば[3]，その最初のテキストは，いうまでもなく *Conscience, instinct divin* である。神父への告解の形で書かれたこの作品の主人公は，まだ

Thérèse と名付けられてはいない。しかし，告白の主が，後に書かれる *Thérèse Desqueyroux* の女主人公と同一人物であることには，疑いの余地がなく，*Conscience, instinct divin* の女主人公もまた，Thérèse と同じように，夫にたいする殺害未遂を犯した女であり，だからこそ，彼女は，神父への手紙で罪を告白しているのだ。しかし，夫 Bernard との心理的関係の観点からみるとき，いまだ名をつけられていないこの主人公と，*Thérèse Desqueyroux* の女主人公とのあいだには，微妙な相違がある。夫にたいする性的嫌悪という点については，*Thérèse Desqueyroux* におけるよりも，むしろ *Conscience, instinct divin* のほうに，より明確な表現が見られる。しかし他方で，主人公は，夫について次のようにも書いていている。

> 《Enfin, il m'aima,se sentit profondément indigne de mon amour,et quoi que je fisse pour le rassurer, essaya d'épouser tous mes goûts.》(4)

明らかに，*Conscience,instinct divin* に描かれた夫は，*Thérèse Desqueyroux* に登場する夫，Bernard とはことなっている。Bernard のように，「人生において一度でも，他人の立場に身を置いて考えたことのない人間」(5)でもないし，自己満足にみちたおそるべき俗物でもない。したがって，*Conscience, instinct divin* の告白者は，夫の自分にたいする無関心に悩む妻ではなく，あくまでも，夫への性的嫌悪に苦しむ人間なのである。だがこのような，性的嫌悪，もしくは性的孤独のうちにこそ，じつは，その後の Thérèse のあらゆる運命の不幸が，胚胎したのであって，そのことは，*Thérèse Desqueyroux* 成立の次の段階，すなわち草稿 I において明らかとなる。

前述のように，最初の未定稿 *Conscience, instinct divin* が，1925年末ごろに中断された後，おそらく1926年初めから同年春にかけて，草稿 I が書かれたものと推定される。Austin 大学 Harry Ransom Humanities

Research Center に保存されているこの草稿 I を検討するとき，Thérèse が，成立のこの段階において，すでにきわめて孤独な女として描かれていることがわかる。彼女は，父に愛されたことがなく，母は，高等中学（le lycée）一年のときに，失踪したとされている。夫の Bernard は，愛情にとぼしい俗物であるのみか，家庭という牢獄の看守の一人でさえある。だが，Thérèse の孤独がとりわけて痛切なのは，女友達の Anne de La Trave にたいしてである。筆者は，すでにべつの論文において，Thérèse の Anne de La Trave にたいする感情は，同性愛的なものであることを述べたので[5]，ここでは再述しないが，Anne de La Trave は，Thérèse のような性的傾向をまったくもたないのみか，Jean Azévédo という男性を熱烈に愛している。Thérèse は，Jean Azévèdo にたいする Anne の感情が，深くかつ真摯なものであることを理解したとき，激しい嫉妬心にとらえられ，Jean の写真の胸部をピンで刺しつらぬくという呪術的な行動にでる。さらに，かつては女友達であったが，Bernard との結婚の結果，いまや Thérèse にとって義妹となった Anne に，Jean にたいする恋を諦めさせるべく，Bernard をはじめとする Desqueyroux 家の依頼によって，Thérèse は，あらゆる努力をかたむけるのである。一応は，Desqueyroux 家のために行なわれたかに見えるこのような努力の背景にあるものは，じつは Thérèse の個人的な情念であり，嫉妬心であることは言うまでもない。Thérèse は，Jean には Anne と結婚する意志など毛頭ないことを明らかにし，Anne を追いつめ，おそらくは Anne を絶望ゆえの死にまでいたらしめたのである。

ここまで筋が進展したところで，草稿 I の執筆は，唐突に中断された。草稿 I の表紙には，作者の覚え書きが明確な日付とともに記されているが[6]，この覚え書きによって見ると，1926年 4 月13日の時点で，作者は，主題の変更を決意した。「家庭の精神」L'Esprit de famille と題された，このメモのなかで，作者は，女主人公 Thérèse による，夫毒殺未遂の物語は，それじたいのためではなく，家庭もしくは家名のために，いかに個人が犠牲に供されるかという主題を，明らかにするために書かれるのだ

と，記している。こうして作者は，1926年4月13日，想を新たにして，いわゆる草稿IIの執筆にとりかかったのであり，この草稿IIは，細部を除くとだいたいにおいて決定稿のテキストに近いものである。

私見によれば，草稿Iから草稿IIへの移行において，作者は，*Thérèse Desqueyroux* 成立のきわめて重要な段階をのりこえたのである。なぜならば，まず第一に，主題の中心が，主人公の情念の問題から，家庭の問題に移行した。決定稿 *Thérèse Desqueyroux* は，家庭にたいする個人の反抗の物語なのである。第二に，主人公の同性愛的感情の記述が大幅に削除された結果，主人公の行動は，謎めいたものとなった。そもそも，夫にたいする毒殺未遂というこの物語の核をなす犯行には，動機がない。

1927年，つまり *Thérèse Desqueyroux* の刊行された年，Mauriac は，*Le Roman d'aujourd'hui* と題された講演のなかで，ドストエフスキーの小説中の人物について触れ，「生ける混沌であり，あまりにも矛盾にみちた個人なので」読者は，彼らについてどう考えてよいのかわからない，と述べたあと，さらに次のように言っている。

> 《Il s'agit de laisser à nos héros l'intelligence, l'indétermination, la complexité des êtres vivants; et tout de même de continuer à construire, à ordonner selon le génie de notre race (…)[7].》

つまり，Mauriac は，フランス小説の伝統にのっとりながらも，バルザック小説に見られるような，明瞭な個性，明確な動機をもった人物ではなく，ドストエフキー的な人物，混沌と謎にみちた人物を描かねばならないと言っているのだ。ところで，Thérèse について言えば，その同性愛的心理の描写が大幅に削除された結果，草稿II以降において，彼女は一種謎めいた存在となった。そして，この謎こそ，この主人公に不思議な魅力を与える結果となったのであり，またこの小説についてさまざまな論議を呼び起こす源ともなったのである。Thérèse の犯行の真の動機を不明なまま

に残したについては，作者が，小説美学上の効果を考えたからにちがいない，とある意味では言えるわけである。

しかしながら，1926年4月の段階における主題の変更，その結果もたらされた，犯行の動機の隠蔽や同性愛的心理描写の削除は，より重大な変化をこの作品にもたらしたように思われる。ほかでもない，それはこの小説に，形而上的なひろがりとも言うべきものが生じたことである。これは，主題の変更がもたらした第三の，そしておそらくもっとも重要な結果である。Thérèse の Anne にたいする残酷な仕打ちは，もしそれを，Anne にたいする Thérèse の愛情の結果，すなわち嫉妬心の結果であると解さないならば，Thérèse の根源的な邪悪さがもたらしたものと解釈せざるを得ない。一例をあげるなら，Bernard との結婚の直前，Thérèse の心理状態について次のような描写がある。

> 《Jamais Thérèse ne connut une telle paix, — ce qu'elle croyait être la paix et qui n' était que le demi-sommeil, l'engourdissement de ce reptile dans son sein.》(8)

草稿Ⅰのテキストのなかでこれを読むならば，「彼女の胸中におけるあの蛇のまどろみ」l'engourdissement de ce reptile dans son sein という表現は，Anne にたいする Thérèse の情念が，一時的に沈静の方向にむかったという意味に解釈できる。Anne の兄である Bernard と結婚することで，Anne とのきずなが確かなものとなり，Thérèse は，一種の安心感を得たのである。しかし，この同じ表現を，決定稿のなかで読むならば，この言葉は，Thérèse の胸中にわだかまる悪への意志，邪悪なる精神としてしか理解できない。

夫以外の人間に愛情をいだかざるを得ないがゆえに，夫殺害の行為にはしるということじたいもちろん悪の行為である。しかし，このような動機すらなく，漠たる人生への不満ゆえに，もしくは心中のなんらかの不可解な衝動ゆえに，夫にたいする毒殺を試みたとするならば，その犯行は，ま

さに原理として，もしくは実体としての「悪」を前提としてしか，理解できない。実際，作者は，Thérèseに，ほとんど超自然的とすら言える，不可解な相貌を与えた。

> 《Si Bernard était rentré à cette minute dans la chambre, il se fût aperçu que cette femme assise sur le lit n' était pas sa femme,mais un être inconnu de lui, une créature étrangère et sans nom.》 (9)

ここに見られるものは，ほとんど「悪」の形象化といっていいものではなかろうか。ところで，Mauriacは，悪の問題こそは，彼にとって最重要の問題であり，自分は悪の問題にとりつかれているのだ，とさえ言っている(10)。そして，まさしく *Thérèse Desqueyroux* について語りつつ，Mauriacは次のように述べている。

> 《Et quoi que le mal soit essentiellement négation, il y a une certaine forme du mal qui est positive,où l'on sent vraiment comme l'intervention de quelque'un(11).》

悪についての言及は，Mauriacの作品中のいたるところに見られるが，たとえば，*Ce que je crois* に，次のような一節がある。

> 《J'ai eu au cours de ma vie non certes la preuve,mais l'impression que le Mal était réellement et substantiellement quelqu'un.Des hommes que je savais être de grands pécheurs ne me donnaient à aucun moment l'idée qu'ils pouvaient être possédés, alors que chez d'autres, d'une vie en apparence moins dissolue, j'avais le sentiment d'une présence.》 (12)

悪を quelqu'un として理解するということは，悪を抽象的概念としてではなく，人格として，もしくは実体として理解するということである。Mauriac が，悪をそのようなものとして受け取っていたとするならば，Mauriac は，アウグスチヌス以来の西欧の伝統的な思想とは，べつのところにいたと言わざるを得ない。なぜならば，伝統的な神学では，悪とは善の欠如，もしくは存在の欠如として理解されてきたからである。むろん Mauriac をマニ教的，もしくはグノーシス教的思想の持ち主とみなすことは論外であろう。しかしながら，Thérèse 作品群に属するもう一つの小説，*La Fin de la nuit* に関して言えば，この小説をいくぶんかはマニ教的作品とみなすことは，かならずしも的外れとは言えまい。なぜならば，この小説中においては，まさに善と悪との戦いが描かれているからだ。

しかしながら，Mauriac は，*Thérèse Desqueyroux* 決定稿において，「悪」の存在を暗示するとともに，それとはまったくことなる超自然的，形而上的要素をも導入するのを忘れなかった。Argelouse に幽閉された Thérèse が，自殺しようとする場面がある。毒薬をまさにあおろうとするのだが，ただ一人 Thérèse の味方になり，ただ一人 Thérèse を愛していた伯母の Clara が，にわかに死んで，Thérèse の自殺は，果たされない。この場面について，竹中のぞみ氏は，近著『フランソワ・モーリヤック論－犠牲とコミュニオン』(13)において，これは，クララ伯母による犠牲であり，いわゆる「諸聖人の通功」communion des saints の原理がそこに働いたことを明らかにされた。それだけではない。この自殺の場面にさきだって，Thérèse は，自分の死後，彼岸において自分を待つはずの quelqu'un に思いをはせるのである。以下の引用は，草稿の II によるものだが，この箇所の記述は，決定稿よりも草稿 II のほうが，作者の意図を明確に表わしているように思われる。

《Elle n'est pas assurée du néant. Elle s'aperçoit qu'elle n'est pas sûre qu'il n'y ait personne. Mais s'il y avait quelqu'un ne

la prendrait-il pas en pitié ? Ce quelqu'un qui devrait savoir à quel point elle est innocente des choses accomplies, qui devrait ‹lire› en elle bien au-delà des régions qu'elle-même connaît, atteindre cette part inconnue de son être, cet immense amour sans objet.》(14)

さらに Mauriac は，おそらく小説の完成後に書かれたと思われる，冒頭のプロローグの末尾に次のように書いている。

《J'aurais voulu que la douleur ,Thérèse, te livre à Dieu ; et j'ai longtemps désiré que tu fusses digne du nom de sainte Locuste.(…) Du moins, sur ce trottoir où je t'abandonne, j'ai l'espérance que tu n'es pas seule.》(15)

上記引用文中に「あなたが聖女ロクスタの名にふさわしい人となることを，私は長いあいだ望んできた」とあるが，草稿 I の表紙には，*Thérèse Desqueyroux* という題名を大きく記した下に，あたかも副題ででもあるかのように，Sainte Locuste の名が書きつけられている。古代ローマの毒殺者で，のちに悔い改めて聖女となったロクスタの名を，題名もしくは副題として記したということは，とりもなおさず，Thérèse の悔い改めとその救済を，作者が想定していたことのなによりの証拠と言わなければならない。さらに引用文の最後の，「私は，あなたがひとりではないことを願っている」という箇所を，遠藤周作は，「あなたにはキリストがついていかれることをぼくは願っているのである」(16)と訳した。これはむろん誤訳ではない。Mauriac は，Thérèse にさまざまな罪を犯させた。すなわち，Jean Azévédo の写真の胸を刺すといった呪術的行為，夫にたいする毒殺未遂，さらには幽閉中の彼女をとらえる死への誘惑などである。のみならず，作品中には，すでに述べたように，悪の人格化，もしくは実体化と言ってさしつかえつかえない要素までしのびこませた。けれども同時

に，作者は，Thérèse の前に，聖なるものへの道をはっきりと開いておき，魂の救済にいたる可能性をも残しておいたのである。Mauriac にとって，悪は救済への道をとざすものではなかった。のみならず，それは救済への道を開くものですらあったのだ。Mauriac は，*Les Anges noirs* のなかで次のように書いている。

> 《Ceux qui semblent voués au mal, peut-être étaient-ils élus avant tous les autres,et la profondeur de leur chute donne la mesure d'une vocation trahie.》(17)

それに他方から言えば，Thérèse の犯したさまざまな罪は，充たされざる愛ゆえのものであり，愛が憎悪に転化したものだと言ってさしつかえない。Anne de La Trave にたいする彼女の愛着は，受け入れられるどころではなかった。そして，夫にたいしては，性的嫌悪感しか感ずることのできなかった Thérèse にとって，人生はまったく耐え難いものにならざるをえなかった。Thérèse は自己の性的な傾向について，まったく無知であり，無意識であったがゆえに，すでに引用した言葉を用いるならば，彼女の心は，《l'immense amour sans objet》と化さないわけにはいかなかったのである。この言葉は，草稿IIにはあって，決定稿からは消えた言葉であるが，Thérèse という人物を理解するためにはきわめて重要な言葉だと考えられる。この《l'immense amour sans objet》は，Thérèse が自分の同性愛的傾向について，無知であったがゆえにこそ，他者への憎しみに容易に転化してしまったのである。

Thérèse は，自分が真に望んでいるものはなにかを知らなかった。彼女の絶望が，まったく制御不可能なものとなったのはそのためである。彼女の無意識は，じつはその犯行そのものにすら及んでいるのであって，「私は，私の罪を知らない」と Thérèse は，言うのである。

> 《Moi, je ne connais pas mes crimes. Je n'ai pas voulu celui

dont on me charge.Je ne sais pas ce que j'ai voulu. Je n'ai jamais su vers quoi tendait cette puissance forcenée en moi et hors de moi.》[18]

決定稿中に見いだされる上記引用文において，「私の内にある，また私の外にあるこの凶暴な力」という表現に注意すべきであろう。*Thérèse Desqueyroux* において，「悪」は，実体化され，ほとんど人格化された結果，それは Thérèse の内なる力である以上に，外部から彼女へと働きかけられる悪魔的なエネルギーのごときものとして，理解されているのである。そうすると，Thérèse はその犯行に関してどの程度責任があるのか，という問題がここに発生する。Thérèse を罪にいたらしめたものが，いわば彼女の外部にある力ならば，彼女の責任は限定されたものでしかない。Thérèse の責任は，自分に向かう外部からの力，すなわち自己の運命の力にたいして行なう戦いに存するということになる。ところで，じつはそれこそが，つまり，Thérèse の彼女自身の運命にたいする戦いこそが，*La Fin de la nuit* の主題をなすものなのだ。

1828年，つまり，*Thérèse Desqueyroux* 刊行の翌年，すでに Mauriac は，この小説の続編にとりかかっている。1928年 3 月 4 日，Sfax から Gabès に赴く汽車のなかで，Mauriac は，*La Fin de Thérèse* と題される短いテキストを書いた[19]。Mauriac は，当時チュニジヤのこの地方を旅行中だったのだ。ところで，このテキストの内容は，Thérèse が恋人にあてて書いた別れの手紙である。しかし，このテキストは，きわめて短いものであるのみならず，車中で書かれたせいか，判読がかなり困難である。したがって，パリに出てきたあと Thérèse が，どのような生活を送ったのか，子細に想像することは不可能なのであるが，いずれにせよ，パリでの彼女の体験，より具体的にいえば恋愛体験は，Thérèse の絶望をいっそう深めただけであるように見える。なぜなら，Thérèse が記しているところによれば，自殺の誘惑にたえずとらえられながらも，むしろ「虚無のな

かに落ちて行くように，生活のなかに落ち込んで行くことを」[20]今や彼女は願っているからである。ここに言われている「虚無」とは，そもそもどのようなものなのであろうか。1930年に刊行された *Ce qui était perdu* の一節は，Thérèse のおちこんだ「虚無」なるものの実体をかいま見せてくれている。*Ce qui était perdu* の主人公，Alain Forcas は，とある晩，パリのシャン＝ゼリゼ通りの木立ちのなかで，一人で椅子に座って泣いている Thérèse に出会うのであるが，その Forcas に，Thérèse は，自分はある男のせいで苦しんでいるのだ，と告白する[21]。彼女が不毛な恋に苦しみ，その孤独と絶望がいまだ終わっていないことをわれわれは想像し得るのである。

さらに，1933年，Mauriac は，Thérèse を主人公とする二つの短編を発表した。すなわち，*Thérèse chez le docteur,* 及び *Thérèse à l'hôtel* がそれである。*Thérèse chez le docteur* は，*Thérèse* が，ある精神科医を訪れる話である。精神科医の診察室で，Thérèse は，自分の不幸な恋愛生活を告白する。Jean Azévédo や Phili との苦痛にみちた体験を告白するのである。Phili は，*Le Noeud de vipères* にも登場する人物で，美青年だが性格薄弱な男である。これらの恋愛は，Thérèse をすこしも幸福にしないのみか，Phili という男は，今や Thérèse を犯罪にまきこもうとさえしているのだ。精神科医がまったく無力であって，いかなる意味でも自分を救うことができないのを見てとると，Thérèse は，やにわにハンドバッグのなかから，白い小さな薬包をとりだす。この薬包がなんであるか，決定稿では判然としないが，草稿のテキストによって見れば，これこそ，*Thérèse Desqueyroux* のなかで，Thérèse が，偽造処方箋によって入手した毒薬にほかならないことは明らかである[22]。Thérèse は，医師の診察室のなかで，またもや自殺をはかろうとしたのだ。この自殺は，医師夫人にとめられて果たされないが，注目すべきは，Thérèse が，医師になげかける非難の言葉である。

《Vous faites semblant de vouloir guérir l'âme et vous ne

croyez pas à l'âme...Psychiâtre, ça signifie médecin de l'âme, et vous dites que l'âme n'existe pas...》[23]

引用文中に言及されている魂の存在，これこそもうひとつの短編，*Thérèse à l'hôtel* のいわば主題をなすものである。なぜならば，この短編のなかで，海岸のホテルで出会った未知の青年は，Thérèse に，魂の存在について語るからだ。やがて神父になることを決意しているかに思われるこの青年は，Thérèse の魂が病んでいること，しかし，いまだ死にはいたっておらず，それどころか生命にみちあふれてさえいることを示すのである。

Jacques Petit が，述べているように[24]，おそらくこれら二つの短編は，Thérèse に関する長編小説の一部として書かれたものであろう。Claude Mauriac の *Le Temps immobile* 中に見いだされる記録は，このような仮説を裏づけるもので，1932年 4 月の記事のなかで，Claude Mauriac は，父 François Mauriac が *La Fin de Thérèse* と題する小説を準備していたこと，しかし，べつの新しい小説のために，この頃その計画が抛棄されたことを，証言している[25]。1928年に，*La Fin de Thérèse* と題されたごく短い断片が書かれてより，1932年 4 月までのあいだ，Mauriac は *Thérèse Desqueyroux* 以後の Thérèse を主人公として，長編小説を書くべく想をあたためていたことになる。では，この書かれなかった長編小説の内容は，いかなるものであったろうか。書かれた二つの短編の内容からおしはかるに，Thérèse に関するこの二つめの長編は，夫毒殺未遂の罪を犯してより，ほぼ十年後，パリで孤独な生活を送っている彼女の姿を描くはずだったと思われる。たえず新たな恋愛体験を求めながらも，幸福を得ることができず，たびたび自殺の衝動にかられ，「わずか十五分なりと，無私の情愛を」願い，「この世に求めるものといえばわずかにそれだけ」[26]であったのに，それすらも得られなかった孤独な女の姿を，おそらく作者は描こうとしたかに思われるのである。とりわけ，この長編は，恋愛体験なるものの不毛を描こうとしたかに思われる。なぜならば，

Thérèse à l'hôtel の終わり近く，Thérèse は，次のように告白しているからである。

> 《Plus rien à attendre de l'amour, aussi inconnu maintenant qu'aux jours de ma jeunesse.Je ne sais rien de lui, hors le désir que j'en ai : ce désir qui, tout à la fois, me possède et m'aveugle ; qui me jette sur tous les chemins morts, me cogne à des murs, me fait trébucher dans des fondrières, me couche, exténuée, dans des fossés pleins de boue.》(27)

ほぼ四十歳にいたった Thérèse を描きつつ，愛がそれじたいではいかに不毛かということ，そしてただ神への愛のみが，彼女の《l'immense amour sans objet》を，満足せしめるであろうということを，作者は書きたかったにちがいない。のみならずさらに一歩をすすめて，この書かれざる長編のなかで恋愛の情念は，ほとんど「悪」と同一視されたにちがいないとすら思われるふしがある。*Thérèse à l'hôtel* は，一人称で書かれ，おそらく Thérèse の日記の一部と考えてさしつかえないものであるが，そこで Thérèse は，自分じしんにむかって次のように言っている。

> 《Ce que tu appelles amour est ce démon qui erre à travers les lieux arides jusqu'à ce qu'il ait découvert une créature à sa convenance, et, il se jette sur elle.》(28)

ここで言及されている démon（悪霊）こそ，*La Fin de la nuit* において，Thérèse の心に棲みつづけ，彼女を苦しめてやまないものである。なぜならば，他の何人よりも強く愛の欲求に動かされつつも，そのような欲求を満たす方途を完全にたたれた Thérèse の心中において，不満は邪悪さとなり，邪悪さは，「悪」への意志，破壊を求める力となって Thérèse の心を支配するにいたっているからだ。初めは，Thérèse を愛した人々

も，やがて彼女のうちに，「あの破壊の力」cette puissance de destruction[29]を，を認めないわけにはいかない，と作者は記している。

しかし，*La Fin de la nuit* の主題は，まさにこの破壊の力にたいするThérèse の戦いを描くことに存した。1935年，*La Fin de la nuit* 刊行の折りに付せられ，のちに削除された序文のなかで，Mauriac はこの小説の主題について，それは，「もっとも重い運命を背負った人々にも与えられている力，—彼らを押しつぶす掟にたいして，否という力」《le pouvoir départi aux créatures les plus chargées de fatalité,—ce pouvoir de dire non à la loi qui les écrasent》[30]を描くことにあった，と断言しているのである。ここで使われている「掟」la loi と言う語は，Thérèse 作品群においてしばしば用いられている語であって，それは，Thérèse の内面を説明するための一種のキーワードであるとすら言える。草稿 I において，この語は，Thérèse の同性愛的傾向を示すのに用いられているように思われる。たとえば草稿 I に見いだされる次のような文章はその一例である。

《(…)c'est qu'ils portent dans la chair sans doute un germe morbide, un trouble instinct dont elle 〈a peur〉 ; ces grands désirs de pureté ne sont qu'une fuite éperdue ,qu'un retrait devant telle loi de son être qui la terrifie ; 》[31]

しかし，「掟」la loi という語は，しだいにその意味をひろげ，さきに引用した *La Fin de la nuit* 初版序文中の用例に見られるように，Thérèse の上にのしかかる呪われた宿命を意味するようになった。それは「悪」の宿命を意味するにいたり，このような「悪」の力と Thérèse の戦いこそ，*La Fin de la nuit* の主題をなすものなのである。そして Thérèse は，言うまでもなくこのような戦いにおいて，勝利をしめるのであって，その意味で *La Fin de la nuit* は，Thérèse の精神的再生の物語，あるいは，魂の復活の物語と言える。

すでに四十歳代のなかばにさしかかり，心臓を病むThérèseは，娘Marieの恋人，Georges Filhotに愛される。Georges Filhotが，Thérèseの前歴，つまりかつての毒殺未遂の犯行を知ったうえで，彼女に思いをよせているだけに，年下の青年からのこのような愛は，Thérèseにとっていっそう貴重なものに思われたにちがいない。Georgesの愛は，かねてからThérèseが求めてやまなかった許しの行為に似るからである。けれどもThérèseは，娘よりもむしろ自分が選ばれた喜びを抑制する。青年の恋を拒絶したあと，Thérèseは，次のように思う。

> 《Marie connaîtra ce bonheur, et Georges aussi le connaîtra. Je leur aurai donné ce que je n'aurai pas reçu. De cela même qui ne fut pas mon partage, je les aurai comblés.》(32)

このような行為は，かつてThérèseが，Anne de La Traveの幸福を妨げるために行なったことのまさに正反対であって，Thérèseが，「悪」の宿命に打ち勝ったことを意味する。しかし，運命の逆説ともいうべきは，このようにThérèseが愛の情念を否定してそれにうち勝ったとき，はじめて愛されざる女であることをやめたという一事である。*La Fin de la nuit*の終わりまで読みいたった読者は，GeorgesのThérèseにたいする愛着が，深く真摯なものであることを理解せざるを得ない。死を目前にして，Thérèseは，信仰と魂の平和こそ得なかったものの，すくなくとも，一人の男性による無私の愛と許しを得ることはできたのである。

さきにも言及した*La Fin de la nuit*の初版序文によれば，Mauriacは当初この作品を，Thérèseのキリスト教徒としての死の場面を描くことで終わらせるつもりで，実際にそのようなテキストを書いた。しかし，作者は，その出来ばえに満足することができずに破り捨て，今日あるがごとき状態で，この小説は終わることになった。しかし，作者は，上記序文において，「今日，私はThérèseが，いかにして死の光のなかに入っていったかを知っている」(33)と書いて，Thérèseの魂がついに救済を得たことを

はっきりと示したのである。のみならず，Mauriac は，*La Fin de la nuit* の刊行の年，つまり1935年，Frédèric Lefèvre とのインタビューのなかで，Thérèse のキリスト教徒としての告解と死を，短編の形で描くつもりだと述べている[34]。この計画が果たされれば，Thérèse 作品群は，二つの長編と三つの短編からなることになり，愛の情念に動かされつつ，悪の宿命に苦しんだ Thérèse が，ついには魂の救済を得るにいたった経緯が，示されることになったであろう。しかしむろん，この三つめの短編は，書かれることがなく，Thérèse 作品群は，*La Fin de la nuit* をもって終わったのである。

Thérèse Desqueyroux という，このあまりにも有名な登場人物の人間像を考察する場合，たんに因習的な家庭生活への反逆者としてのみ，考えるべきではないと私は思う。「悪」の宿命に悩みながらも，ついには精神的再生を果たした人物として，この女性を考えるべきなのである。そう考えるためには，この人物を，Thérèse 作品群に属するすべての作品をとおして考察する必要がある。そうするならば，Thérèse とは，ほとんど神話的な次元にまでたかめられた形象であって，それが象徴的に意味するところのものは，充たされざる愛の欲求ゆえの人間的苦悩であることが理解されるであろう。

注

（1）「*Thérèse Desqueyroux* の草稿 I について」『芸文研究』第59号1991年。「Mauriac : *Conscience, instinct divin* について」同誌第63号1993年。

（2）上記拙論「Mauriac : *Conscience, instinct divin* について」『芸文研究』第63号 pp. 146-147.

（3）Claude-Edmonde Magny は，すでに早く1950年に，le cycle de Thérèse の語を用いている。(*Histoire du roman français*, t. 1,Seuil, 1950.)

（4）*Conscience, instinct divin, Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, II, Bibliothèque de la Plèiade, 1979, p.12.

（5）「『テレーズ・デスケルー』の成立に関する一考察」『慶応義塾大学日吉

紀要』第4号1987年。

(6) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, II, éd. citée, p. 929.

(7) *Le Roman, ibid.*, p. 765.

(8) *Thérèse Desqueyroux, ibid.*, p. 36.

(9) *Ibid.*, p. 41.

(10) *Les Paroles restent*, Grasset, 1985, p.178.

(11) *Souvenirs retrouvés*, Fayard/INA, 1981, p. 223.

(12) *Ce que je crois*, Grasset, 1962, pp. 136-137.

(13) 北海道大学図書刊行会，1996年，pp.142-143.

(14) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes,* II, éd. citée, p. 984.
〈 〉の記号は，読解に若干の不確定要素のあることを示す。

(15) *Ibid.*, p. 17.

(16) 『モーリヤック著作集』第2巻，春秋社，1983年，p.17.

(17) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes,* III, 1981, éd. citée, p. 316.

(18) *Thérèse Desqueyroux*, éd. citée, p. 26.

(19) *Œuvres romanesques et théâtrales complêtes* III, éd. citée, pp. 976-977.

(20) *Ibid.*, p. 976.

(21) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes,* II, éd. citée. p. 312.

(22) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes,* III, éd. citée, p. 987.

(23) *Ibid.*, p.17.

(24) *Ibid.*, p.979.

(25) *Le Temps immobile*, VII,Grasset, 1983, p.67.

(26) *Thérèse à l'hôtel, Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, III, éd. citée, p. 60.

(27) *Ibid.*, p.74.

(28) *Ibid.*, p.61.

(29) *La Fin de la muit, Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, III, éd. citée, p. 83.

(30) Préface de l'édition originale, *ibid.*, p.1012.

(31) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, II, éd. citée, p. 971.

(32) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes,* III, éd. citée, p.161.

(33) *Ibid.*, p.1013.

(34) *Les Paroles restent, op. cit.*, p.74.